

台湾文学における戦争記憶の継承 —— 呉明益『眠りの航路』から『自転車泥棒』へ

明田川 聡士

少年達が故郷を出る時、抱いて居た夢は高級技術者（技師や技手）。それに連なる道は狭くて険しい道でした。それも終戦で夢は破れ、泡のように消えてしまいました。——陳森山^①

ある歩兵の中隊では、全員がトラックに乗って進撃するようになった。マレー名物になった「銀輪部隊」も一部は内地から持って来たものであったが、かなりの部分は現地で集めた自転車だった。歩兵が全部「銀輪部隊」になったり、トラックの機械化部隊に早がわりしたので、進撃の速度も速くなった。——小俣行男^②

はじめに

アジア・太平洋戦争（以下、太平洋戦争）の終結からすでに七十五年が過ぎ、実際の戦争経験を伝えることのできる当事者も多くが鬼籍に入り、その数も年々少なくなってきた。時が経つに連れて太平洋戦争の記憶を次の

世代に伝えることは、日本国内のみならず東アジア全域で共通する課題であるとも言える。

かつて日本の植民地であった台湾は、戦時中に旧日本軍の南進基地として位置づけられ、終戦までの間に約二十万七千人の台湾人が徴用されて南洋を中心に戦場へ送り込まれた。そうした太平洋戦争の記憶は戦後の台湾人にとっても無視できず、これまで台湾人作家による創作の中でもたびたび認めることができた。当初は陳千武（一九二二～二〇一一）のように特別志願兵などとして自ら直接の従軍経験をもった作家、あるいは李喬（一九三四～）や陳映真（一九三七～二〇一六）のような幼少期に台湾の農村で銃後の一面を目にした作家などによって、その見聞から物語が描かれることが多かった。また、一九七〇年代半ばからは、李雙澤（一九四九～七七）や宋澤萊（一九五二～）など太平洋戦争を直接経験した当事者よりひとつ下の世代にあたる、戦後生まれの作家たちによっても描写されてきた。そこで描き出される物語には、一九七〇年代当時の台湾社会に共通する認識であった、日本による植民地統治の歴史に対する批判という視点が見え隠れしていた。そして今日では、先の太平洋戦争とは深い接点を多くは持たない、さらに次の世代の作家による創作が進んでいる。文学作品の中に浮かび上がる太平洋戦争の表徴という視点から言えば、それはこのように現代に至るまで連続と続いており、戦後台湾文学において太平洋戦争の記憶とはすでに古典的題材のひとつになっているのであった。

傅勤閑「戦争記憶与戦争認識——世代観点下的台湾戦争小説研究」（二〇一二）は戦後台湾文学における戦争表象について作家の世代別に論じた学位論文だが、それによれば、台湾では一九八〇年代末に戒嚴令が解除されて以降、人々が自身による日本統治期の経験・体験について語ることが比較的容易となり、そうした社会的機運の変化を受けて二〇〇〇年以降にはそれまでの世代とは異なる物語の描出が生まれているという。民主化の流れに乗り社会全体が台湾本土化へと急速に舵を切る中で、それまで国家による公式的な見方であった中国民族主義と決別しながら、太平洋戦争と台湾人の特殊な関係性を描き出していったのである。³⁾ 本稿で論じる呉明益

(一九七一)⁽⁴⁾のほか、原住民プユマ族の巴代(一九六二)や客家人の甘耀明(一九七一)などは、台湾人が抱える太平洋戦争の記憶を描く新しい世代の代表的作家であった。

それでは、先行する作家と比べて太平洋戦争とのつながりが相対的に薄いこうした新世代の台湾人作家たちは、自身の創作において如何にして先の大戦を捉え、何を伝えようとしているのだろうか。本稿ではこの世代の代表的作家である呉明益に視点をあて、彼による二作の長編小説——『眠りの航路』(二〇〇七)⁽⁵⁾および『自転車泥棒』(二〇一五)⁽⁶⁾——を考察の対象とするが、そのどちらの作品も物語の中では太平洋戦争が無視できないテーマとなつている。前者は作者が創作した最初の長編小説であり、後者は国内外でベストセラーとなり国際的にも高い評価を受けた近年の代表作である。呉明益は自身が戦争経験のない世代に属することを、小説を執筆する上で大きな弱点として感じていたが⁽⁷⁾、彼によつて創作される物語は、昨今の台湾文学の中でも太平洋戦争の記憶をもっとも奥深く描き出す作品のひとつであった⁽⁸⁾。戦争経験を直接的にはもたない作者であったが、創作を通して太平洋戦争の歴史と向き合い、その記憶を継承しようとしているのである。これまで呉明益の小説は、その物語中で入り交じる幻想的な描写によつて戦争を隠喩化していると指摘されてきたが、それは作者が現実として存在する歴史的事実の細部には関わらないということを意味するものではない。本稿ではこのような問いから出発し、先にあげた二作の長編小説を読み解きながら、同時代の台湾文学における太平洋戦争に関わる歴史描写の一端を考察したい。

第一節 『眠りの航路』と台湾少年工

(一) 台湾人少年の労務動員

呉明益の『眠りの航路』は現代台湾社会に生きる主人公の「わたし」と、かつて太平洋戦争中に台湾少年工として日本へ渡った「三郎」という二つの軸で物語が展開される。物語の冒頭で、わたしは台北近郊の陽明山で大量の矢竹が枯れる稀少な自然現象を目撃し、それ以来生じる睡眠障害のために夢をみることができなくなってしまう。そこでわたしはテレビ局で働くガールフレンドが勧めてくれた風変わりな専門医の診察を受け、やがて神奈川県大和市で開業医を営む日本人医師「白鳥先生」を紹介されて日本へ渡っていく。一方、三郎の部分では太平洋戦争末期を主な時代背景とし、台湾人少年が神奈川の「空C廠」と呼ばれる海軍工廠で新型戦闘機の製造に従事した経緯が描かれていく。三郎は台湾南部の嘉義で生まれ育ち、太平洋戦争勃発後に少年工の募集に応じて植民地台湾から渡航したのであった。このように物語では一人称の語りと三人称の視点が入り交じる中で、二人の関係も明らかになっていく。終戦後台湾へ戻った三郎は台北で電気工具として下働きし、市内西部にある中華商場で自身の店を構えた。三郎とはわたしの父親であり、戦時中に父が経験した過去について息子は知らないままにいる。そして三郎は中華商場の取り壊しと同時に失踪してしまう。それから十数年後、三郎の遺留品となった二つの空き缶から「留日高座同学会」と書かれた同窓会への招待状と会員録、飛行機や建物のデッサン画、少年たちの写真、日本の歌謡曲テープ、台湾と日本の都市を記した手書きの地図などが出てくると、わたしの心は引き寄せられていく。やがてわたしは治療のために日本で白鳥先生を訪ねる際、かつて父親が少年時代に少年工として歩んだ足跡を追っていくのであった。

台湾少年工とは、戦時中に植民地台湾から内地へ労務動員された台湾人の少年たちを指す。太平洋戦争勃発後、

旧日本海軍は神奈川県高座郡の厚木飛行場に隣接する場所に新たな戦闘機生産拠点の開設を急いでいた。⁽¹⁰⁾それが当初「空C廠」と仮称された高座海軍工廠であり、国内最大の海軍工廠として計画されたが、戦争の激化により多くの成人男性を応召に取られた中で深刻な労働力不足に直面していた。そこで海軍は皇民化教育が徹底され、学生に対する勤労働員も始まっていた台湾からも労働動員し、その労働力で補填しようとしたのであった。そうした海軍の要望に応じた台湾総督府は、一九四二年から終戦までの間に十二歳から十八歳まで累計八四一九名の台湾人少年を送り込んだというが、その多くが戦前の初等教育にあたる国民学校を卒業した程度の幼さだった。彼らは高座海軍工廠での三ヶ月間の研修後は海軍軍属の身分で、戦闘機部品の組立工や仕上工、溶接工として働いたのであった。⁽¹³⁾

保坂治男『台湾少年工 望郷のハンマー』（一九九三）によれば、当時台湾の少年たちが少年工に応募した理由は、それを植民地に生きる人間の宿命として感じた以上、貧困から脱出し上級学校の卒業資格を得ることに對して大きな期待を寄せていたためであったという。⁽¹⁴⁾台湾での募集時には、勤務中は衣食住と給金が支給されるほか、三年間の勉強と二年間の工場勤務で甲種工業学校の卒業資格を得られるという約束がなされていた。⁽¹⁵⁾元少年工である林清泉の回想にも書かれているように、「貧困のなかでどうにかして進学し学歴を得たかった台湾人子弟は心を動かされた」⁽¹⁶⁾のであった。もともとその応募には学業優秀、心身健全、両親の承諾など諸要件を満たす必要があったが、「保護者のはんこなしでは応募出来なかったので、多くは〔親の——筆者注〕はんこを盗み、こっそりと教師の手に渡して、願書を作成した」⁽¹⁷⁾有り様でもあったという。

こうした経緯で少年工は内地へ渡ったが、虚構の物語としての『眠りの航路』でも三郎は同様の道筋をたどっていく。三郎は十三歳の年に教師の講話から少年工の募集を知り、給金と卒業証書に引かれて父親の印鑑を盗み応募した。日本語の常用家庭に育った子供ではなかったが、「東三郎」という日本名を名乗り、台湾南部の高雄

から輸送船に乗り込んだ。物語では三郎が自身で日本名を名乗ることにより、内地への期待は大きく膨らんでいく。例えば、輸送船の中では次のような描写が見られる。

いま船上にいる全ての少年はみな日本名でお互いを呼び合うようになった。ぎこちなく、しゃがれた、たまに突然裏返る少年独特の声。北へ向かう輸送船は、少年たちを新しい名前の世界へと向かわせた。⁽¹⁸⁾

台湾から内地へ向かう船内で三郎ら少年たちはお互いに日本名で呼び合い、「自分がもう前とは違い、まるでいまから、まったく新しい人になったかのように感じ」⁽¹⁹⁾ながら、遠からぬ未来へ大きな期待を寄せていく。先に挙げた保坂の著作によれば、少年たちは実際に日本名を得たことで歓喜した者が少なくなかったという。⁽²⁰⁾ 植民地下での同化政策としての改姓名は台湾では許可制を採り、奨励的な意味合いが強かった。その申請には様々な要件が設けられており、貧困家庭に育った多くの少年工にとっては改姓名の制度自体が無縁だったのである。もともと日本名を得たとは言え、少年工が名乗った日本名とは厳密に言えば公的手続きが必要な改姓名制度によるものではなく、日本風の名前で呼ぶだけの内地式命名であったと推察されるが、彼らはそれを素直に喜んだのは間違いない。⁽²¹⁾ 物語ではこうした少年工が感じた「新しい名前の世界へと向か」う希望が、内地へ渡ることへの期待に重ねられて描かれていく。

ただし、『眠りの航路』では少年工の期待や喜びばかりを一面的に描くのではない。彼らは空C廠⁽¹⁸⁾に到着後、上官の鉄拳制裁におびえながら工場での溶接や板金、ネジ打ちを繰り返していった。そうした日々の中で三郎は度重なる米軍機B29の空襲により少年工の仲間を失い、日増しに気力さえも消沈していく。「爆撃の音は爆弾自体よりもますます威力を増し、爆弾は体や宿舎を破壊し、森と工場を焼き尽くすけれども、爆撃の音は希望を打

ち壊す⁽²²⁾」ことに強く絶望を感じていくのだった。こうして『眠りの航路』では台湾少年工を題材として、三郎を中心に期待と絶望の間で揺れ動く彼らの内面の振幅にも注視しながら、台湾人の少年たちが戦時下に内地へ労働員させられ、旧日本軍の戦闘機製造に従事した歴史的な経緯を説き起こす物語となっていたのである。

(二) 少年工たちの戦後史

一方で軽視できないのは、『眠りの航路』で三郎が後年に振り返る戦後の記憶でもある。日本の敗戦後に飛行場は総司令部に接収され、「米軍の困惑したまなざしの下で、少年たちは証明書を出し、稚拙な英語で自分は日本人でなく、フォルモサの人⁽²³⁾」と強く訴えた。三郎も闇市に出入りしては「リンゴの唄⁽²⁴⁾」を口ずさみ、「自分が戦勝国の身分であることを確認するかのよう⁽²⁵⁾」に、ゆっくりと大胆に振る舞いながら、東京や横浜、名古屋へと足を延ばしていった。こうした描写には、戦時中に少年工として使役されてきた台湾人少年が戦後は自らで立ち上がっていく姿が印象づけられている。実際、復員した日本人の後に残り残された八千余名の少年工は、自身で高座台湾省民自治会を組織し、神奈川県庁や海軍省など関係方面と連日交渉を続けながら台湾への帰還を模索していた⁽²⁶⁾。また、元少年工の東俊賢による回想では、帰還船を待ちながら不安に駆られていた少年たちに希望を与えたのは、戦後最初の日本映画『そよかぜ』の主題歌「リンゴの唄」であり、手をたたきながら歌い合っただけでまし合ったという⁽²⁷⁾。こうした点からもうかがえるように、『眠りの航路』の物語では戦時下の様子を描くだけでなく、戦後直後の日本の世相も巧みに下敷きにしながら混乱の最中を生き抜く台湾人少年の姿に焦点を当てていく。そして三郎は一九四六年の春に久里浜港から帰還船「永祿丸」⁽²⁸⁾に乗り込み、台湾へと引揚げていった。

ただ、『眠りの航路』での少年工をめぐる描写は、三郎が引揚船から下船後の手続きで「日本国籍を離脱し中華民国籍に入っ⁽²⁹⁾」てから途絶えてしまう。その後に三郎は台北へ出て中華商場に入る電気店の店主となるが、戦

後台湾の高度経済成長期に生きる彼の姿には、もはや少年工の面影は微塵も感じられない。かつて少年工であった事実が再び三郎と結びつくのは、次のように物語の結末に近づいてからであった。

一九九一年に、わたしは高座の同期である邱金声、簡国立と一緒に大和へ戻った。わたしたちは東京や名古屋、江ノ島に行き、工場付近にも立ち寄った。もちろん、すべてが変わっていた。こうした場所が記憶を呼び起こし、わたしたちは車内でおよそ五十年前に起きたことをしゃべったけれど、でも意図的にどこか飛ばしているような気もした。⁽³⁰⁾

ここで語り手となる「わたし」とは老年に入った三郎であり、物語の主人公である「わたし」の視点とは別である。「一九九一年に」三郎は高座海軍工廠の同期生たちとともに日本を旅した。旧友が往事を振り返っては日本の軍歌を口ずさむ時、三郎は「まるで五十年近く前の真つ暗な夜に宿舎へ帰る小道に戻ったかのような」錯覚を引き起こす。それは半世紀にわたる時間的隔たりを越えてよみがえった少年工の記憶であったが、同時に日本から引揚げた後に戦後台湾社会を生き抜いた三郎が「意図的に」塞いできた記憶でもあった。

日本の植民地統治を脱した戦後の台湾では、国民党統治下で政治や法律、言語をはじめ、あらゆる社会制度が一変した。物語中の三郎と同様、実際に永祿丸で台湾に引揚げた先述した林清泉によれば、大転換した生活環境に直面し「就業して生きていくにも進学して勉強するにも相当に大きな制限を受け」、常に「心のなかでは不安と恐ろしさがあふれ、とても重い精神的プレッシャーになった」という。⁽³¹⁾ こうした心境は少年工としての体験を持つ者であれば、程度の差こそあれ誰しも抱えていた葛藤であった。⁽³²⁾ とりわけ戦後直後に国民党が日本による被植民色を一掃した時期には、その心理的影響は計り知れないものであった。彼らは日本の侵略戦争へ加担し同胞

を裏切った背叛者（漢奸）として後ろ指をさされる不安を感じ、周囲の視線を気にして暮らすことを強いられたのであった。⁽³⁴⁾ 林清泉も「我々が幼い頃を犠牲にして歩んだ足跡は、戒嚴令下での政治的環境に気兼ねして、声すら上げられなかった」と述べるように、かつて少年工だった戦時中の自分自身の経験について、かたくなに口を噤んだのであった。

こうして戦後長い間にわたり沈黙を続けた元少年工が自身の経験を自ら主体的に語り始めるのは、一九八〇年代以降のことであった。同じく元少年工の陳碧奎によれば、民主化前夜の台湾社会で彼らは同窓会組織に相当する「高座同学聯誼会」を立ち上げたが、その団体名に「同学」という二文字をわざわざ組み入れたのは、戒嚴令下で集会や結社の自由を取り締まる関連法規に抵触することを恐れたためであったという。⁽³⁶⁾ この頃には台湾各地で同様の組織が約二十箇所も結成され、戒嚴令解除翌年の一九八八年に「台湾留日高座聯誼会」という全島規模の親陸団体も発足してからは毎年のように全島大会を開くようになった。⁽³⁷⁾ そして一九九三年には少年工が最初に日本へ渡ってから半世紀が経過したのを記念して、神奈川県綾瀬市などで一三〇〇名超の元少年工たちが集う大規模な記念大会が開催された。⁽³⁸⁾ それをきっかけに一九九〇年代以降の台湾社会では、ジャーナリストや作家による少年工に関する紹介が相次ぎ、彼らについての社会的認知も徐々に広まり始めたかのようにも見えたのであった。⁽³⁹⁾ とは言え、総体的に見れば、張良澤が『高座海軍工廠台湾少年工写真帖』（一九九七）を刊行した際に指摘したように、一九九〇年代末に至っても少年工の存在は歴史の隙間に埋もれたまま、当事者以外で知る人は依然として限定的だったのである。⁽⁴⁰⁾

ここで『眠りの航路』の物語に戻ると、三郎は一九九一年に元少年工の同期生たちと一緒に日本を旅し、かつて過ごした工場や宿舍の跡地を再訪しながら往事の様子を懐かしく振り返った。この時に三郎と旧友を繋いだのは、実在した高座同学聯誼会を彷彿させる「留日高座同学会」という組織であったことだろう。三郎は留日高座

同学会が寄こした招待状と会員名簿を大切に保管していたのである。その後物語では、三郎が少年工として日本に滞在した時の追憶にふけりながら、一九九二年の中華商場の解体で行方不明となってしまう。三郎の失踪により少年工の記憶は忘却され闇の中へと埋没してしまうが、それを中華商場の取り壊しと重ねて描き出すことは、当事者として少年工の経験を知る世代の消滅を示唆するものでもあった。⁽¹⁾

このように『眠りの航路』は「台湾社会に長い間隠れていた痛み」⁽²⁾を見つめ直すものであり、太平洋戦争中に台湾人が少年工として内地へ渡った戦争経験を照射していた。だが、それは同時に、戦後台湾社会で歴史の壁に隠れるかのように当事者自身が口を固く閉ざし、人々に広く知られることになかった少年工の戦後史にも視線を向けるという両義的な意味合いを含んでいたのである。

第二節 『眠りの航路』における戦争経験世代への共感

(一) 浮かび上がる父親の影

前節で確認したように、呉明益の『眠りの航路』は太平洋戦争末期に日本への労務動員を経験した台湾少年工の姿を描き、戦後の台湾社会で見過ごされてきた歴史の一面に対しても視線を向けるものであった。それはまさに劉亮雅が指摘するように、抑圧されてきた戦争世代の台湾人の記憶を呼び戻し、日本統治期／国民党統治期の間で途切れてしまった台湾社会の戦前と戦後を巧みに結びつける物語であったと言える。⁽³⁾

それにしても、作者の呉明益が物語で少年工の存在に対してこのように光を当てていったのは、そうした台湾社会が抱えた歴史的あるいは社会的な理由によるためだけだったのだろうか。実は呉明益が『眠りの航路』を創作するきっかけとなったのは、彼自身の父親もまた少年工のひとりだったからでもある。呉明益は二〇〇〇年に

台北文学賞を受賞した際、少年工と自身の父親の関係について次のように述べていた。

受賞のことはを三百字から一千字に増やすという知らせを受けた三時間後、携帯電話から二番目の兄が話す、冷たく鼓膜を突き刺して骨にまで直接響くかのような声が聞こえてきた。父が急死したと。

父親の遺品を整理していた時、客間に置いてあるテーブルの引き出しをひとつ開けてみると、三つ目の引き出しには父が小学生だった頃の名簿が入っていた。それから植民地時代に少年たちが徴用されて日本の高座へ行き雷電の戦闘機を作ったことを書いた本なども。毎日夜通しで父の遺体に付き添う時、これら父が大切にしてきたものを広げて読んでみると、まるでわたしが知らない父親の記憶が目の前に浮かび映し出されたのを見たかのようにだった。

一九四三年から四四年の間、八四一九名の十数歳の少年が、進学の機会を求めて、自ら日本へ渡り飛行機を製造しながら勉強した。父はそうした八四一九名の海を渡った少年工のひとりだった。

わたしには父が少年の時の青春が、静かにそこに寝そべっているのが見えた。⁽⁴⁴⁾

これによれば、実際に呉明益は父親が急死した後で、それまで父が自分には決して語らなかつた少年工としての過去を抱えていた事実によく気づいたという。すでに『眠りの航路』をはじめ複数の作品の後記でもはっきりと書いているように、この体験の後で五、六年にわたって少年工に関連する資料を集めながら物語展開を構想し、さらには日本でも実地調査を重ねながら創作していったのである。⁽⁴⁵⁾ 父親の遺品を糸口にして構想された『眠りの航路』の物語で、主人公の「わたし」が三郎の足跡をたどっていくのは、時代の波に翻弄された少年工であった父の半生を作者自身が深く理解しようとしていく姿と重なるのであった。

戦後の台湾文学において、このように時代に左右された個人や家族の運命を基調としながらも、国家や民族が歩んだ歴史や悲哀といった広がりのある物語を描き出す作品が数多く出現するようになったのは、台湾社会で民主化が進んだ一九八〇年代以降のことであった。『眠りの航路』が刊行されたのは折しも戒厳令解除から二十年が経過した頃であったが、同作もそうした二つの世紀をまたぐ台湾文学界における新たな文学創作の潮流の中にあった。⁽⁴⁶⁾ 呉明益は物語中で少年工の三郎という父親の影が差す男を描き出してはいるが、それは作者自身にとつての肉親の過去を描きながら、台湾人が広く共有する太平洋戦争末期の記憶を呼び起こすものへと大きく敷衍していく表現だったのである。

(二) 物語化される不戦の意志

そして『眠りの航路』では、主人公のわたしや作者自身の父親の影が差す三郎を軸にして、ほかにも様々な人物が描かれてもいる。なかでも目に留まるのが「平岡」という学徒動員された青年であろう。平岡は「東大法学部」の学生で、勤労動員により徴用されたけれども、身体不適格のため宿舎の図書館員をつとめていた。⁽⁴⁷⁾ 太平洋戦争末期の殺伐とした雰囲気の中で、三郎らは自分たちよりも五、六歳年上の平岡を慕い、平岡も上官とは違い少年たちに対しては友好的であった。空襲の無い日には平岡が少年工に日本の怪談話やギリシア神話を語り聞かせ、三郎もこうして平岡が話す物語を聞くのを楽しみにしていた。

呉明益自身による言及のほか、すでに複数の先行研究も指摘しているように、物語中で登場する平岡という青年の表象をめぐっては、そこに三島由紀夫の姿を多く読みとることができる。⁽⁴⁸⁾ 虚弱な体質により軍隊への入隊を拒まれ少年工宿舎での勤労動員を命ぜられた平岡は、「日本全国の軍人や市民、工場にいる台湾人少年が全員まもなく徴用され、誰もがお互いに祝福しながら海辺で戦死することを信じていた」⁽⁴⁹⁾。華やかに戦死していくこと

を心から望む平岡であったが、終戦による「最大の心残りは戦争に参加できなかったこと」だったと三郎に打ち明ける。その一方で、三郎は米軍の空襲で少年工の親友を亡くしており、平岡が強く望む戦死に共感することはできないままでいる。やがて三郎は平岡の話を静かに聞きながら、「本当のことを言う」と、ぼくは船に乗った後で後悔したんだ。もし父さんが印鑑を隠して見つけられなかったら、どれだけよかったらうか」と自らで戦争に加担してしまった経緯を悔いていくのであった。

このように『眠りの航路』の物語では、三郎や平岡がお互いで口にする「心残り」あるいは「後悔」という言葉で太平洋戦争が回顧されていくが、その二人の気持ちは対照的である。三郎は自発的に戦争に関わってしまった過去を後悔し、平岡は自身が戦死できなかった過去を心残りに思った。実際、平岡のモデルとされた三島由紀夫は、徴兵検査での軍医の誤診により即日帰郷を命ぜられ、高座海軍工廠で勤労働員しながら終戦を迎えた。勤労働員中には台湾人の少年工たちとも親しくなり、江戸時代の怪異小説である『雨月物語』を語って聞かせていたともいう。戦争末期に死を宿命として合理化せざるを得ない運命感の中で生き残ったことへのわだかまりは、その後の三島自身の半生にも少なくない影響を与えたようである。『眠りの航路』では平岡という人物像に戦死を美化していくイメージが塗り重ねられていくが、そこでは三島の影を引き合いに出しながらも片や三郎には共鳴させないことで、物語を通して不戦の意志が暗示されていくのもであった。

こうして三郎を中心にして広がる作中での不戦の基調は、現代に舞台を移してからも繰り返される。わたしが日本へ渡航し三郎の足跡を追いながら白鳥先生を訪ねる時、多摩動物公園に出向く場面がある。道すがら空襲の傷跡を少しも残さない東京の街並みに目を見張りながら、動物園の中で白鳥先生から次のような話を聞かされて驚愕するのであった。

白鳥先生は何か考えながら黙ってしまい、続けて言った。「知ってますか？ 一九四五年度の春に、上野動物園でB29の乗組員を展示したことを」

わたしは震えてしまった。白鳥先生を見ながら、「展示」の意味を考えていた。「つまり、パイロットがパンドのようにガラス小屋に入れられたっていいことですか？ 虎のように鉄檻の中にいたっていいことですか？ それとも多摩動物公園のような放し飼いの場所に？」⁽⁵⁴⁾

わたしは白鳥先生の話から、一九四五年一月にB29爆撃機の編隊が東京で前例のない爆撃を始めた時、「Hap」という名の連合軍飛行士も撃墜されて上野動物園で拘束されたことを知る。その事件について初めて聞きながら、ひとりの兵士が檻の中に押し込まれて恐怖に満ち、「許しを請いながら食べ物を求め、人間としての尊厳を失っていった」⁽⁵⁵⁾様子を想像していくのであった。

東京大空襲に関する著述が多い早乙女勝元によれば、実際一九四五年一月にはB29搭乗員であったレイモンド・ハップ・ハロランが茨城で撃墜されて旧日本軍の捕虜になっていたという。ハロランは捕虜として拘留されていた同年三月には東京大空襲にも遭遇し、その後は上野動物園の檻の中で捕虜生存者として展示されながら辱めを受けた。同じように戦争末期に日本で捕虜となった連合軍飛行士は五〇〇名以上にもものぼったが、その半数近くが終戦を待たずに死亡していたため、彼は戦後に重要な戦争証言者として見なされていた。そして二〇〇年以降には何度も日本を訪問しては関係者と親交を深め、旧日本軍の捕虜として終戦を迎えた元連合軍兵士が銃口を向け合ったかつての敵を許すようになっていった姿は、人々が不戦の平和を誓う象徴的な物語として称賛されていたのである。⁽⁵⁶⁾

こうして見てみると、『眠りの航路』で白鳥先生が話すHapの境遇とは、実在した連合軍飛行士の身の上を

もとにしたものである。とは言え、作者が物語中で主人公のわたしに意識させるのは、実際に語り継がれるような敵軍として対峙した者同士が手を握り合うことで生まれる平和ではなかった。精神科医の白鳥先生は、H a p が終戦後も心に病を抱え悪夢にうなされながら生き続けた半生について語り始める。「健康なアメリカ人としてもう一度やり直そうとしたけれど、でもそれができなくて、戦争のひどい記憶から逃れようと努力しながら、四十年間も悪夢にうなされ続けてきた」という話を聞き、わたしは絶句してしまう。そして「戦争はとても遠くにある馴染みのないもので、わたしは実際には戦争経験のない人なのだ」と自らが太平洋戦争から遠く離れた世代にいることを強く自覚し、「父さんはどのように夢と向き合ってきたのだろうか」と三郎の戦後に目を向けていくのであった。

物語の中で目立つようした不戦への意志や戦争世代への共感といったものは、呉明益は『眠りの航路』を創作する際に特に意識していたようである。それは同作発表後に応じた欧佩佩によるインタビューで、次のように述べていたことから見て取れる。

わたしは次の世代の人に伝えたいのです。わたしの父親世代が戦争をしてから数十年が経ってしまったけれど、次の世代では戦争がまだ始まっていないから。わたしが思うのは、誰か読者がわたしの小説を読んでくられて、深々と戦争のばかばかしさや恐ろしさを感じて、永遠に反戦者となってくれないだろうかということ(60)です。

ここからもわかるように『眠りの航路』の物語展開は、父と子という二つの世代から太平洋戦争をめぐる記憶の断絶と継承を描き出すとするものではあったが、戦争経験のない戦後世代のわたしが三郎の戦争記憶をたど

るのは、世代間にまたがる戦争経験の空白を縮めながら後代へと不戦の意志を伝えようとする表現であったとも言える。そうした意識は三郎と平岡の対話、わたしと白鳥先生の対話というように、作中で登場する様々な人物による対話の中で浮き上がることでその輪郭がより明瞭になっていく。それは戦争経験のない作者自身が自覚的に戦争の記憶を物語化しようとする文学的な営為から生まれてくるものであった。

(三) 民族意識との距離感

こうして、『眠りの航路』は作中で物語化される不戦の意志が目立ったが、結末の近くで次のような展開が敷かれていることには留意したい。わたしが日本からガールフレンドに送った電子メールの中で、神奈川から名古屋へ移動した際に中国人青年と出会ったことが言及される。わたしが首都圏を離れて名古屋へ向かったのは、三郎が残した遺留品の地図に東京や神奈川と同じように印がつけられていたからであり、戦後直後には三郎自身も空襲の犠牲となった親友を偲んで足を運んでいた。名古屋は「米軍が爆撃した重点都市で、市全体は駅近くの小さな路地を除いて、ほとんどが焼夷弾によって更地になっていた」と描かれるが、実際戦争末期には高座海軍工廠からも多数の少年工が派遣され、空襲によって大きな被害を受けていた。そうした太平洋戦争の記憶と強く結びつく名古屋の街で、わたしは日泰寺という仏閣を参観し、そこで日本へ旅行中の中国人民大学生「王剛」と知り合う。宗教建築を学ぶ王剛は、かつて日泰寺に納められていた中国で制作された千手観音の由来について語りながら写真を見せてくれるが、わたしはその時に初めて戦時中に名古屋と南京の間で交換されたという観音像が存在することを知ったのである。

日華親善千手観音慶讃会『千手観音光来記』（一九四二）によれば、太平洋戦争勃発直前の一九四一年に名古屋・南京両市の間で観音像が取り交わされたという。中国ではその前年に汪精衛政権の南京国民政府が樹立し、

名古屋市はそれを祝して阿里山の巨木を使った東洋一の大きさを誇る十一面観音像を寄贈した。一方、南京市からはその答礼として毘盧寺という古刹に納められた千手観音が名古屋市へ贈呈されたのであった。⁽⁶⁵⁾ これら海を渡った二尊の観音像の顛末については、『眠りの航路』の物語でも「中国が千手観音の菩薩像を使い、日本と十一面観音像を交換した歴史⁽⁶⁴⁾」として言及されていく。ただ、王剛はそうした経緯を「日本軍が南京城へ侵攻し、南京大虐殺を繰り返りひろげた⁽⁶⁵⁾」ことに対する中国国民の怒りを懐柔するための奇策だったと非難し、⁽⁶⁶⁾ それを聞いたわたしは当惑してしまふのであった。

わたしがその写真はどうか聞きたいと王剛は絶対に思っただろうが、でも聞きたくなかった。彼の話がまた終わらなくなるから。わたしと王剛はお互いに連絡先を残したけれど、わたしは彼に連絡しないだろうし、彼もわたしには二度と連絡をよこさないに違いない。わたしたちは明らかに第二次世界大戦に対する考え方が違うのだから。王剛は自信満々な人で、まるで民族的な優越感に浸る中国の学生のようにだった。彼が話す時に民族意識でもってこちらの立場をずっと打ち砕いていくのは理解できる。でもわたしには彼のそうした戦争に対する見方を受け入れることがあまりできなかったのだ。⁽⁶⁷⁾

わたしは王剛の話に耳を傾けながらも、会話を続けることができなくなる。そして結局「彼に向かって自分の父親がかつて日本軍だったということを書えなかった⁽⁶⁸⁾」まま別れるのであった。抗日戦で日本と戦火を交えた父祖を持つ中国人青年と、父親が皇国臣民として旧日本軍の末端で戦争動員させられた台湾人のわたしでは、「明らかに第二次世界大戦に対する考え方が違う」のである。王剛との会話でも、わたしが常に意識するのは三郎／父の世代である。こうして『眠りの航路』の物語では、名古屋でのわたしと中国人青年の出会いを通じて

も、太平洋戦争下での台湾人の数奇な境遇をあらためて認識していくのであった。

台湾人である主人公が民族主義的な枠組みから外れ、自分たちの特異な運命を直視するという構図は、戦後台湾社会が歩んできた歴史的経緯とも重なるところがある。かつて国民党政府は一九七〇年代に国際政治の表舞台から姿を消し、その反動から国内では自らの政治的正当性を示すために中国民族主義を強く推し進めてきた。そうした時代に台湾人が自らを国民史における歴史の主人公として語ることは、断然許されないままであった。⁽⁶⁹⁾ 学校教科書や主要メディアの視点が中国を軸としたものであり続けたように、戦後の台湾で長い間公式に認められてきたのは「中華民国」の概念と重なり合う中華意識にほかならなかった。⁽⁷⁰⁾ その後に自らの郷土として台湾社会に対する人々の関心が増し、台湾人が歩んできた近現代史に視線が集まるのは一九九〇年代に入ってからのことであり、戒厳令が解除されて民主化が一段と進むまで待たなくてはならなかったのである。

前節で述べたように、戒厳令解除後に至ってようやく少年工が自分たちの戦時中の行動を公言するようになってきたのも、こうした時代的な変化から生じたものだった。『眠りの航路』において、主人公のわたしが中国民族主義を振りかざす王剛との対話から遠ざかっていくことは、台湾社会で残り続ける中華意識を拒否し解体していくことの陰画にもなっている。⁽⁷¹⁾ そして、そうしたわたしの視点から三郎の姿を見つめていくのは、時代の変化の中で中華意識を退けながら自分たちの過去を追憶し、旧時には体制の底辺にいた人々の歴史を見つめ直していく行為であったと言える。本稿の冒頭で、民主化後の台湾文学界では国家による公式的視点であった中国民族主義と決別し、太平洋戦争における台湾人の特殊な位置づけを描き出す作品が出現し始めたことに言及したが、その点については呉明益『眠りの航路』の物語展開からも十分に看取できるのであった。

第三節 『自転車泥棒』における戦争経験世代への共感

(一) 銀輪部隊の進攻

こうして、物語の中で現代と太平洋戦争の時代を行き来しながら戦争の経験を追憶し継承しようとする傾向は、呉明益の長編小説としては二作目にあたる『自転車泥棒』でも同様であった。同作でも主人公は、呉明益自身を彷彿させる「わたし」である。わたしは知人の自転車コレクターによる仲介で、中華商場の解体直後に失踪した父親が乗っていた自転車を二十年ぶりに見つけるが、物語ではその自転車が今に至るまでの経緯をたどっていく。ただし、その後記に「この小説は第二次世界大戦史、台湾史、台湾の自転車発展史、動物園史、チヨウの工芸史などにまで話が及ぶ」と記しているように、物語全体では自転車にとどまらず様々な題材が複層的に重なり合う。そうした内容は作者自身も、歴史的事実に関わるところは考証を繰り返しながら書き上げたと言明していたように⁽⁷³⁾、フィクションとして描かれる物語ではあったが歴史の再現性を重視していた。そして同時に、それは『眠りの航路』とは別個の独立した小説ではあったが、相互の物語はまったくの無関係でもなかった。物語の展開においても、わたしの父がかつて少年工として旧日本軍の戦闘機を製造していたこと、わたしがそれを「眠りの航路」という小説で触れたことなどが作中で明かされていくのである。このように『自転車泥棒』も現実と虚構の境界線をあいまいにしながら、戦争の時代から遠く離れた現代台湾社会に生きるわたしの視点をもとにして太平洋戦争の歴史と戦争経験者の内面に注目していくのであった。⁽⁷⁴⁾

こうした『自転車泥棒』の物語でも目を引くのは、自転車の行方とともに言及されていく旧日本軍の南方進出である。わたしの知人には原住民ツォウ族で自転車の顛末を知るアツバスという名の男がいるが、やがてわたしはアツバスの父親バスヤが残した手記やテープから、戦時中に銀輪部隊と呼ばれた旧日本軍による自転車部隊

の存在について初めて知るのであった。物語の中では自転車に乗った歩兵が「マレー半島からまっすぐ南下し、シンガポールでイギリス領インド陸軍を打ち破る」⁽⁷⁵⁾までの模様を次のように描いていく。

海南島や台湾で訓練を積んだ工兵部隊は、予想もしなかったスピードで道路と橋を手早く直し、狙撃兵はマレー人の姿をして密林や村に潜り込んで英印兵を恐怖に陥れた。そして一番悩ませたのが銀輪部隊だった。彼らは山間部から川の上流を渡河し、部隊の両翼からジャングルを突き抜けて何度となく急襲をかけたのである。⁽⁷⁶⁾

太平洋戦争の開戦であった真珠湾奇襲が始まる一時間ほど前、東南アジアでは旧日本軍がマレー半島北東に上陸し、南へ急進しながら極東におけるイギリスの根拠地シンガポールを攻め立てた。⁽⁷⁷⁾それは日本の南進政策による新たなアジア支配の始まりでもあった。一九四二年五月までに英領マレー、英領ボルネオ、シンガポール、フィリピン、オランダ領東インド、ビルマなどで旧日本軍による直接統治（南方軍政）が始まり、東南アジアのほぼ全域が日本の支配下に入ってしまった。⁽⁷⁸⁾そうした南進の緒戦となったマレー戦で、旧日本軍は戦車部隊の進攻と同時にマレー縦貫道路を自転車で進撃し、銀輪部隊の名を轟かせていったのであった。⁽⁷⁹⁾

このように、『自転車泥棒』では東南アジアでの旧日本軍の南方進出を物語の背景に敷いていくが、留意したいのはこの時にバスヤが銀輪部隊で台湾人軍夫として動員され、後には彼の遺留品となった手記とテープを通じて太平洋戦争の記憶が語られていく点である。十八歳で青年団に加わったバスヤは、輸送船で海南島を経由し南洋へ送られた。その肉声が吹き込まれたテープは「わたしは直接南方軍に配属され、マレー半島や仏領インドシナでしばらくの間、補給運搬を担った」⁽⁸¹⁾と戦争参加の実態を振り返るが、そこでは台湾人軍夫が戦争の最前線で

腐乱した死体を片付けながら「わずかに残された糧食と弾薬を後送する」役目を負っていったことが明かされる。実際当時の銀輪部隊に原住民の台湾人軍夫がいたのかどうか、管見の限りでは不明だが、現在の台湾社会では少なくともそうした銀輪部隊の存在自体について知る人はほとんどいないという⁽⁸³⁾。先の『眠りの航路』が現代台湾人によって忘却された台湾少年工の存在を描き出したように、『自転車泥棒』では人々には周知されていない銀輪部隊と台湾人の歴史的な関係を題材とし、呉明益は現代社会では埋もれてしまった戦争の記憶を掘り起こしていくのであった。

中国戦線から南洋戦線まで拡大した太平洋戦争では、戦況が進むにつれて軍夫の不足に拍車がかかり、多くの原住民がその動員の対象となった。軍夫はいずれも非戦闘員であり、南洋での炎天灼熱の最前線で旧日本軍の武器や弾薬、糧秣などの運搬を担い、飛行機やガソリンの掩体、道路開設などにも駆り出されたのであった⁽⁸⁴⁾。この時期の原住民による積極的な戦争参加は、植民地支配下で歴然と存在した差別意識に苦しんだ結果であったことはよく知られるところである。

こうした戦時下で原住民が感じた複雑な心理状態については、『自転車泥棒』でも看過されていないかった。バサヤが「皇軍の一員となることに大きく憧れた」⁽⁸⁵⁾のは、「高砂族と呼ばれた我々が、差別を受けない方法は、軍隊に入るしかなかった」⁽⁸⁶⁾からであったように、植民地統治下で生きた原住民が抱え続けた行き詰まり感を描き出す。物語の中でバサヤが吹き込んだ「銀輪部隊」と「北ビルマの森」と書かれた二種類のテープにも、戦地で原住民軍夫が奮闘する姿が記録されていた。だが、そうしたバサヤでさえも戦闘の最前線となったビルマの山の中に送り込まれて現地人の象使いととも象の群れを率いる中で、「戦争に参加できたのは光栄だと錯覚していたわただしかったが、飢餓の苦しみと死への恐怖で、とつくに戦争がさっぱり嫌になっていった」⁽⁸⁷⁾と不戦の心情へと変化が生じていくのもあった。このように物語では台湾原住民が旧日本軍の末端で太平洋戦争に参加した過去が語

られていくが、その経験は戦後も彼ら自身を束縛する苦しみとして残り続けた。バस्याが「日本兵だった過去がある以上、このことで中国の軍人が恨みを根に持つ」⁽⁸⁸⁾ことを不安に思い、かつて戦場で経験した出来事を家族に對しても一切明かさなかったのは、そうした心境を表していた。その後も太平洋戦争中に旧日本軍に動員させられた事実を人目に触れぬよう隠し続け、南洋の戦場での記憶そのものを封印していくが、それを物語の中ではバस्याの語りで次のように描いていくのであった。

昭和二十二年、台北で大きな衝突が起き、またたく間に全島へ広がっていった。中国の軍人がむかし日本兵や軍属だった者を必死になって探し出しては悪さをすると聞き、わたしは戦場から持ち帰った写真や記念に取っておいた物をすべて焼いた。もう誰にも銃を持って欲しくはなかったし、誰からも銃を突きつけられなくはなかった。⁽⁸⁹⁾

ここで暗示される台北での衝突とは戦後直後に起きた二二八事件と思われるが、留意したいのは、物語で戦中に日本兵の末端として戦った事実を当事者自身が戦後の台湾社会で秘し隠しながら生きていくという点に視線を向けるのが、台湾少年工をめぐる戦争記憶について触れた『眠りの航路』の展開とも軌を一にすることである。内地で戦闘機生産に従事した少年工であれ、南洋で日本の南方進出の駒となった原住民軍夫であれ、彼ら当事者自身が戦後の台湾社会では口を噤んで語らなかつた戦争の一面に焦点を合わせ、不戦の意志を掲げていく点は同じである。このように『自転車泥棒』も『眠りの航路』と同様に、台湾社会の戦前と戦後が繋がる中で忘却されてしまう歴史を見つめながら、戦争そのものを拒否していくのであった。

(二) 中国遠征軍を通して見る太平洋戦争

ここまで確認してきたように、両作では少なくない共通項が見られるが、一方で『自転車泥棒』の物語では『眠りの航路』でほとんど前景化されることのなかった中国の影も無視できなかった。物語の中で銀輪部隊が進攻するマレー半島から、バスヤが戦争に幻滅する北ビルマの森へと舞台背景が移っていく展開は、その誘導線となっている。北ビルマでは窮地の英印軍に中国軍が加わり旧日本軍との攻防が繰り返されるが、物語ではその様子を次のように述べていく。

一九四三年の冬が始まったばかりの頃、中国軍インド遠征軍の第一二団と菊兵団と呼ばれた日本軍精鋭部隊の第十八師団が、フーコンという谷地で交戦を繰り返した。それより前、遠征軍は日本軍と戦う英印軍を掩護していたが、ちょうど日本軍の勢いが盛んな頃で、しばらくするとラングーンが落ち、イギリス側が撤退した。日本軍が追撃すると、イギリス軍は取り囲まれてしまった。その時新編三十八師団の師団長は孫立人であった。孫立人は兵数で劣る麾下部隊で七千人ほどのイギリス軍を救出したのである。それが歴史に名を轟かす「エナンジャウンの戦い」であった。⁽⁹⁰⁾

太平洋戦争中、ビルマ北部から中国西南部の雲南にまたがる国境地帯には、蒋介石の中国軍を支援する連合国側の国際補給路として援蒋ルートが設けられていたが、そこは日中間での主要な戦場にもなっていた。⁽⁹¹⁾そこでの戦闘のひとつであった一九四二年四月のエナンジャウンの戦いでは、孫立人の率いる新編三十八師団が英軍司令大将を含む七千余名のイギリス軍と宣教師たちを救出した。中国が旧日本軍を迎えて壊滅に追い込んだ数少ない戦闘の事例でもあり、英軍を救った大勝利として一時は蒋介石からも激賞された。⁽⁹²⁾孫立人の麾下にあった部隊が

数で圧倒的優位に立つ敵軍を撃破したというエナシジャウンの戦いは、現在の台湾社会でも語り継がれる戦争史であるとも言われている⁽⁹³⁾。

『自転車泥棒』では、そうした太平洋戦争中のいわゆる中国遠征軍をめぐる進攻も物語の背景に敷いていく。孫立人の部隊は日本が占領したビルマへ反撃を続ける主力部隊となり、結果的に中国遠征軍と連合軍の猛反撃によって、日本兵は「撤退に撤退を重ねるだけで、完膚なきまでにやられた後に、飢餓、逃走、壊滅、再編成を繰り返していった⁽⁹⁴⁾」。先に述べたように、物語は当初は銀輪部隊が象徴するマレー半島での日本の侵攻でもって展開していったが、やがて舞台が北ビルマに移るに従って、進攻から潰走へと潮目が変わる旧日本軍の勢いを暗示していくのもあった。

こうして太平洋戦争での中国遠征軍に視点を置いていくが、そうした戦争の記憶が現代の台湾社会へと繋がるのが、かつて遠征軍とともにいたアジア象と外省人の老兵「ムー分隊長」である。ムーは雲南出身の孤児であったが四川で物乞いをしていた時に中国遠征軍に加わった。ビルマの現地人が飼ひ慣らしていたアジア象を中国へ連れて帰る命令を受け、彼は象を連れながら「険しいビルマ公路に沿って、雲南、貴州、広西、広東を経由して一千キロの長い行軍⁽⁹⁵⁾」の末に、国民党とともに台湾へ渡ったのであった。北ビルマの森で旧日本軍に徴用されていた象はやがて「リンワン」と改名させられ、巨大な艦船に乗せられながら台湾海峡を通過していく。そこでは中国兵と象が時代の奔流に飲み込まれながら戦火の中を台湾へと移動していく姿が、強く印象づけられているであった。

羅広仁「走過大江大海」(二〇一八)によれば、かつて実際に台湾にはビルマから中国大陸を経由して台湾海峡を渡った「林旺^{リンワン}」と呼ばれたアジア象がいたという。もともと太平洋戦争中に旧日本軍によって徴用され、銃や砲弾、糧秣などの運搬のために使役させられていたが、孫立人がビルマへ進撃後には日本側から接收した一頭

になった。一九四五年四月に中国遠征軍の国軍兵士とともに中国へ戻り、ラシオと昆明を結ぶビルマ公路を経て広東に至るまで南下を続け、広州では陸軍墓地の建設にも関わった。その後、国共内戦が激しくなると孫立人に従って船で高雄へ渡り、共産党との緊張関係の中では戦争の時代における平和の力として象徴化されて、対米外交のツールとしても使われたという。そして一九五四年に台北動物園に移って以降は二〇〇三年に世界最高齢のアジア象として病死するまでの間、台湾人の誰もが知る園内の看板動物となっていたのであった。⁽⁹⁶⁾ こうした林旺の数奇な半生はまさに「台湾近代史の縮図」⁽⁹⁷⁾でもあり、戦後台湾人の記憶の中で強く残り続けたのである。

このように『自転車泥棒』では旧日本軍による台湾原住民の戦争動員に焦点を当てただけではなく、実在したアジア象をモデルにしたリンワンや国民党老兵のムーを通して太平洋戦争から国共内戦へと続く時代の流れを描いていく。その物語設定は本省人や外省人といった省籍にかかわらず、広く台湾人読者の戦争の記憶を呼び覚ますかのようにもある。物語では終戦後にリンワンが国軍兵士の頭に鼻をあてて彼らの夢を嗅ぐが、そこで嗅ぎ出される夢はいずれも兵士たちがジャングルでの砲撃戦で負傷していった姿である。それは永遠に消え去らない太平洋戦争の記憶であり、「誰にも眠らせずに、たとえ眠ることができたとしても一生涯その夢に邪魔され」⁽⁹⁸⁾続けることを暗示していく。このように戦後も人々に影響を与えながら残り続ける戦争の記憶を物語を通じて伝えようとする姿勢は、前作『眠りの航路』の内容においても見られた。ただし、『自転車泥棒』ではそうした過去の戦争が残した傷跡を見つめるだけではない。物語の結末では、リンワンを台湾に連れてきた老兵のムーが、高雄の港でかつて少年工として日本へ渡ったわたしの父親に邂逅した事実も明らかにされる。二人が「港のベンチに腰を下ろして、いつまでも自分から消えていかない時間のことをお互いに語り合う」⁽⁹⁹⁾様子は、かつて正反対の立場にあった者同士が太平洋戦争の記憶を分かち合っていく姿でもあった。それは太平洋戦争で敵味方に分かれた戦後台湾人の間での和解を描くものであり、複雑な戦争記憶を抱える台湾社会を見据えて示されたかのよう

もある。こうして、呉明益の『自転車泥棒』は世代を越えて過去の戦争経験を追いかけるだけではなく、前作では明確に描かれなかった異なる歴史観を持つ国民同士の和解さえも示唆しながら、太平洋戦争の記憶を継承していくのであった。¹⁰⁾

むすびに

本稿では、呉明益の『眠りの航路』と『自転車泥棒』という二編の長編小説を取り上げた。戦後の台湾文学では一九八〇年代の民主化期以降、九〇年代を通じて二〇〇〇年代初頭に至るまで、省籍の違いや族群の差異を強調し、人々が歩んできた歴史的な側面を描き出す物語が多く出現した。『眠りの航路』でも太平洋戦争中に内地へ渡った少年工の戦争経験に視点を合わせると同時に、戦後台湾社会で歴史の壁に隠れるかのように当事者自身が口を固く閉ざし、周囲には広く知られることのなかった少年工の戦後史さえも間接的に浮かび上がらせることで、日本統治期から国民党統治期にかけて生き抜いた台湾人の特異な半生を描き出していた。一方、『自転車泥棒』でも、こうした少年工と同じように旧日本軍の末端に位置づけられて南洋の戦場へと送り込まれた台湾原住民に目を向けている。台湾人の戦争経験を描写するという点で言えば、両作はこのように少なくとも共通項が見られたが、さらに『自転車泥棒』の物語では『眠りの航路』ではほとんど前景化されることのなかった中国の影も無視できなかった。その点で特徴的だったのは、北ビルマを背景に中国遠征軍の活躍や密林から連れ出されて台湾へと渡ったアジア象の姿さえも描き出すことである。それは省籍や族群の違いによる制約を取り払いながら異なる歴史観を持つ者同士の和解さえも暗示するものであり、作中では太平洋戦争の記憶を描き出す中で不戦の意志を掲げていくのであった。

これらはいずれも太平洋戦争を直接的には経験していない呉明益自身による、戦争経験世代に対する理解と共感といった視点から生まれたものであった。そこで軽視できなかったのは、作者が目指したのがそうした世代間にまたがる戦争経験の空白を埋めていきながらも、物語を通じて後代へと不戦の意志を伝えようとする表現であったということでもある。

こうした呉明益の太平洋戦争を回顧していく物語は、内省的な追憶でもって戦争を批判的に捉えていくものであったが、それはかつて太平洋戦争を直接的にあるいは間接的に経験してきた、呉明益よりも上の世代の台湾人作家が表現してきた戦争の代償を厳しく指弾する物語とは明らかに異なる傾向を示している。呉明益が自身の物語中で太平洋戦争を描き出す際に意識したのは、戦争の史実やその残酷さを仔細に描写し尽くすことではなかった。むしろ彼が創作の中で目指したのは、歴史的な事実に沿いながらも自分自身を徹底的に戦争経験の無い世代として客観視しながらその時代を追いかけることで、世代や省籍、あるいは族群といった現代台湾社会に残る垣根を越えながら太平洋戦争の記憶を継承していくところにあったのである。

〔中国語要旨〕

對臺灣戰後作家而言，第二次世界大戰仍是盤旋於文學作品中且無法迴避的背景或主題。新世代作家吳明益（一九七一～）的作品經常被稱為臺灣文學的新鄉土類型，這個新世代不但處於文字與網路世界的夾縫之間，同時也與曾親身經歷過戰爭的作家們有著截然不同的寫作風格。本論文以吳明益長篇小說《睡眠的航線》（二〇〇七）及《單車失竊記》（二〇一五）為起點，討論臺灣新世代作家如何在作品中處理二戰主題，進而探討臺灣新世代文學的戰爭歷史記憶。

注

- (1) 陳碧奎・張瑞雄・張良澤編『高座海軍工廠台湾少年工写真帖』(台北・前衛、一九九七年)二三七頁。なお、同書によれば陳森山は一九二九年生まれ、台湾少年工の第二期生として内地へ渡ったという。
- (2) 小俣行男『続・侵掠——太平洋戦争従軍記者の証言』(現代史出版会、一九八二年)八十頁。なお、同書によれば小俣は読売新聞社の従軍記者として、一九三八年の中国戦線から一九四二年のビルマ戦まで従軍したという。
- (3) 傅勤閣『戦争記憶与戦争認識——世代観点下的台湾戦争小説研究』(台南・国立成功大学台湾文学研究所修士論文、二〇一二年)三十四、六十三頁。
- (4) 呉明益は台北市の生まれ。国立中央大学中文系で博士号を取得し、現在は国立東華大学華文系教授。二十代初めより創作を開始し、最初の短編小説集『本日公休』(一九九七)で作家デビューした。後にテレビドラマ化された短編小説集『天橋上の魔術師』(二〇一一)のほか、台湾の自然環境と人との関わりを主題にしたネイチャーライティングとしてのエッセイ集『迷蝶誌』(二〇〇〇)や『蝶道』(二〇〇三)なども知られている。聯合報文学大賞をはじめ数多くの受賞歴がある。
- (5) 呉明益『睡眠的航線』(台北・二魚文化、二〇〇七年)。なお、本稿では同書(初版)を底本に用い、テキストの引用はすべて拙訳である。
- (6) 呉明益『單車失窃記』(台北・麦田出版、二〇一五年)。同書は二〇一八年に英訳版が台湾人作家として初めてプッカー国際賞にノミネートされ、世界的にも高く評価された。なお、本稿では同書(二版)を底本に用い、テキストの引用はすべて拙訳である。
- (7) 『眠りの航路』の創作直後に応じたインタビューでも、「すでに戦争からだいぶ遠ざかってしまい、わたしの世代の作家でも、まだ戦争を書けるのだろうかと思っていた」、「最も辛かったのは戦争を経験したことがないことで、実際に戦争の場面を見たことがないことだった」とさえ答えていた(欧佩佩「呉明益——与二十年後的戦争対話」『誠品好読』第七十八期、二〇〇七年、九十九頁)。
- (8) 馬翊航「生産・禁制・遺緒——論台湾文学中的戦争書写(一九四九〜二〇一五)」(台北・国立台湾大学台湾文学研究所博士論文、二〇一七年)二四二頁。
- (9) 林宗翰「呉明益小説中的幻夢与戦争——以《睡眠的航線》和《單車失窃記》為例」(台東・国立台東大学華語文学研究所修士論文、二〇一六年)を参照した。

(10) 現在の神奈川県大和市、座間市および海老名市にまたがる場所である。宿舍関連施設は大和市側に、工場は座間市と海老名市側に位置していた(大和市編『大和市史 六 資料編 近現代 下』大和市、一九九四年、四七七頁)。

(11) 高座海軍工廠は約一万名の工員を擁し、当初は小型機・中型機で各々月産一〇〇機の生産が想定された国内最大の海軍工廠であった。政府による生産命令は一九四四年四月より始まり、終戦までの間に計三四一機の生産が予定されていたとも言われるが、戦火の悪化に従って設備建設や部品調達が遅延し、生産実績は大幅に低下した。米軍機による空襲を避けるために地下工場でも生産が続けたが、実際には一九四五年三月の月産二十三機をピークに累計一二八機を生産したに過ぎなかった(樋口雄一・鈴木邦男「大和市と台湾の少年工——高座海軍工廠関係資料調査概報」『大和市研究』第十八号、一九九二年、六十五頁、および「昭和二十二年二月高座海軍工廠の概要(米国防略爆撃調査団報告)」、大和市編、同上書、五〇四～五〇五頁)。

(12) 樋口雄一「解題」、大和市役所管理部庶務課編『高座海軍工廠関係資料集——台湾少年工関係を中心に』(大和市役所管理部庶務課、一九九五年)五頁、および近藤正己「台湾の労働動員」、大濱徹也編『近代日本の歴史的位相』(刀水書房、一九九九年)一八一頁。

(13) 王溪清・郭嘉雄「記日據末期赴日本為『海軍工員』之台湾少年心酸史」『台湾文獻』(第四十八卷第四期、一九九七年)一二八頁、および鍾淑敏「望郷的鉄鎚——造飛機的台湾少年工」『台湾史料研究』(第十期、一九九七年)一二〇頁。なお、高座海軍工廠では交代なし十時間勤務体制が採られていた(前掲「高座海軍工廠の概要」五〇二頁)。三ヶ月間の研修後には、兵庫県西宮市や姫路市の川西航空機、名古屋市の三菱重工業、群馬県大泉町(旧、小泉町)の中島飛行機など、全国に散らばる民間の航空機製造工場にも少年工として派遣された(保坂治男「台湾少年工望郷のハンマー」ゆい書房、一九九三年、七十七～七十一頁)。

(14) 保坂治男、同上書、七十二～八十頁。なお、台湾少年工を主題としたドキュメンタリー映画『緑の海平線』(郭亮吟監督、二〇〇七年)によれば、一九四四年に始まった台湾全島での徴兵制による兵役を避ける目的で応募した少年もいたという。

(15) 早川金次「台湾少年工と高座海軍工廠の思い出」、野口毅編『台湾少年工と第二の故郷』(展転社、一九九九年)九十八頁、および陳碧奎「赤手空拳——一個「少年工」的故事」(台北・前衛、一九九八年)六十三頁。なお、早川によれば、国民学校高等科卒業生には三年間の勉強と二年間の工場実習で甲種工業学校の卒業資格が、中等学校卒業生には二年間の工場実習のみで高等工業学校の卒業資格が与えられたという。

(16) 林清泉「屏東子弟扶桑行——日本戦時台湾少年工憶往」『屏東文獻』(第十七期、二〇〇三年)三九九頁。

(17) 張瑞雄「留日高座青少年の台湾魂」、陳碧奎・張瑞雄・張良澤編、前掲書、十九頁。

- (18) 呉明益、前掲『睡眠的航線』、三十六頁。
- (19) 同上書、三十七頁。
- (20) 保坂治男、前掲書、四十三頁。
- (21) 内地式命名については、植野弘子「台湾における名前の日本化——日本統治下の『改姓名』と『内地式命名』」(『アジア文化研究所研究年報』第四十二卷、二〇〇七年)に詳しい。
- (22) 呉明益、前掲『睡眠的航線』、一四三頁。
- (23) 同上書、二六四頁。
- (24) 同上書、二六五、二六六頁。なお、原文は「蘋果之歌」である。
- (25) 同上書、二六五頁。
- (26) 王溪清・郭嘉雄、前掲論文、一二二頁。なお、参照元の原文には「高座台湾人民自治会」(傍点筆者)と書いてあるが、これは「省民」の誤植であると思われる。
- (27) 東俊賢「燃ゆる志の試練と感謝——東俊賢回想録」(私家版、二〇〇七年)および「台湾少年物語」(私家版、二〇一二年)を参照した。
- (28) 呉明益、前掲『睡眠的航線』、二六九頁。なお、永祿丸とは実際に一九四六年二月に台湾へ向けて出航した帰還船でもあった(王溪清・郭嘉雄、前掲論文、一二八頁)。
- (29) 同上書、二七〇頁。
- (30) 同上書、二九〇頁。
- (31) 同上書、二九三頁。
- (32) 林清泉、前掲論文、四一〇頁。なお、林清泉自身は浦賀港より乗船したという。
- (33) 前掲「高座海軍工廠台湾少年写真帖」の編者のひとりである張瑞雄は、「自分達の生まれ故郷に帰ったには違いなかったが、もはや離れた時の台湾ではなくなった。官用語、統治のシステム、考え方、それから価値観まで変わってしまった。それがたった二、三年の間に起こった事とは思えなかった」と述べている(張瑞雄、前掲論文、三十一頁)。
- (34) 林清泉は自身の回想でも、「故郷の台湾に戻った後も政府の役人は日本を敵視する雰囲気のみならず、わたしを相手にしてくれず、自力更生で言語や学歴など様々な障害や衝撃を乗り越えなければならぬ苦勞に直面した」と述べている(林清泉、前掲論文、四一一頁)。なお、戦後直後の台湾における漢奸懲罰については、葉亭蓀「戦後初期台湾に於ける漢奸懲罰政策と台

- (35) 湾社会の反応」『北東アジア地域研究』(第二十五号、二〇一九年)に詳しい。
- 林清泉、同上論文、四二二頁。なお、「(台湾では——筆者注)戦後の数十年間、「公的な」抗日史観の影響を受け、台湾人は「自ら」日本兵になったことを恥とした。加えて白色テロの時代の影もなお残り、実体験のある多くの台湾人は日本兵であったことを自分で認めることができなればかりか、あまつさえ強制されたとさえ言った」という指摘も見られる(周婉窈「海行今の年代」台北・允晨文化、二〇〇三年、一五〇頁)。
- (36) 陳碧奎、前掲書、二七三頁、および陳碧奎「諸言」、陳碧奎・張瑞雄・張良澤編、前掲書、十三頁。
- (37) 林清泉、前掲論文、四二二頁。
- (38) 劉嘉雨「僕たちが零戦をつくった——台湾少年工の手記」(潮書房光人新社、二〇一八年)一五七頁、および石川公弘「台湾少年工と台湾を想う」、野口毅編、前掲書、一四一頁。
- (39) 例えば、日本での記念大会には中華電視(中華テレビ)記者も同行し、「夢碎東瀛——台湾団仔造飛機」という特集番組を制作していた。新聞では劉育岑「造飛機、造飛機、造到日本去——台湾少年工赴日記事」『聯合晚報』(一九九三年九月二十六、二十七日)、戴火木「老照片說故事——台湾団仔赴日造飛機」『中國時報』(一九九五年五月二日)などが掲載され、劉は「桜花戦火少年行——台湾少年工赴日造飛機的故事」『歷史月刊』(第六十八期、一九九三年)を発表してもいた。また、同じ頃には周姚萍「台湾小兵造飛機」(台北・天衛文化、一九九四年)という青少年向けの書籍も刊行されていた。
- (40) 張良澤「被歴史掩埋的「歴史」——「台湾少年工」採訪記」、陳碧奎・張瑞雄・張良澤編、前掲書、三十二頁。
- (41) 中華商場とは呉明益の小説での中心的な舞台である。先述した第一作目の『本日公休』に収録された諸作品で描かれて以来、彼の創作ではたびたび言及される場所である。実際、中華商場は一九六一年に落成し、台北市内におけるランドマークのひとつであった。その後、台北市の主要商業エリアが市内東部へ遷移するに従って勢いも後退し、一九九二年に都市再開発により解体された。『眠りの航路』の物語で、三郎の再来日が少年工にとつての節目である一九九三年ではなく一九九一年に設定されているのは、中華商場の解体による三郎の失踪と連動させるためであったと思われる。中華商場の歴史と往事の様子については「青春の印記——中華商場記憶徵集」<https://choppingyard.com/>(二〇二一年一月三十日アクセス)に詳しい。
- (42) 陳芳明「歴史如夢——序呉明益《睡眠的航線》」、呉明益、前掲『睡眠的航線』、四頁。
- (43) 劉亮雅「後殖民与日治記憶——二十一世紀台湾小説」(台北・国立台湾大学出版中心、二〇二〇年)一〇九頁。なお、ここで言う「戦争世代の台湾人」とは、いわゆる本省人としての出自をもち、太平洋戦争を直接経験した世代の人々を指す。
- (44) 呉明益「得獎感言」、台北市立図書館「創作屬於台北的文学伝統——第三届台北文学獎作品集」(台北・台北市立図書館、

- 二〇〇〇年）七十八頁。
- (45) 吳明益、前掲『睡眠的航線』、三〇四頁、吳明益『蝶道』（台北・二魚文化、二〇〇三年）二八一頁、および吳明益『家離水辺那麼近』（台北・二魚文化、二〇〇七年）二五六頁。なお、吳明益は林柳君のインタビューに応じた際にも同様に答えていた（林柳君「吳明益作品中的文化転訳、美学実践与隱喻政治」（新竹・国立清華大学台湾文学研究所修士論文、二〇一一年、一九三頁）。
- (46) 邱貴芬「面对浩劫的存活之道——閱讀吳明益《睡眠的航線》」、吳明益、前掲『睡眠的航線』、十三頁。
- (47) 吳明益、前掲『睡眠的航線』、一六四頁。
- (48) 例えば、吳明益は先に挙げた林柳君によるインタビューでも、「小説を書く過程で、史料をめぐっていた時、わたしは三島由紀夫も少年工の部隊にいたことを見つけ」、三島をモデルにした青年が三郎と対話する場面を意図して設けたと述べていた（林柳君、前掲論文、一九三頁）。こうした設定をめぐっては、吳明益は様々な文章の中でたびたび言及していた（黃宗潔「走過蝶道——吳明益訪談錄」『思想』第十一期、二〇〇九年、および吳明益「一場向金魚跪拜以求生的戰爭——關於我的小說裡的二戰前三事」『人社東華』第六期、二〇一五年）。また、李慈惠は『眠りの航路』で描き出される死の象徴と美意識を三島由紀夫の諸作品との関係から論じてもいる（李慈惠「吳明益《睡眠的航線》之夢境書写与歴史記憶」台南・国立成功大学台湾文学研究所修士論文、二〇一〇年）。
- (49) 吳明益、前掲『睡眠的航線』、一三七頁。
- (50) 同上書、二三八頁。
- (51) 佐藤秀明・井上隆史・山中剛史「決定版 三島由紀夫全集 第四十二卷 年譜・書誌」（新潮社、二〇〇五年）を参照した。
- (52) 同上書、一〇八頁。なお、加藤邦彦によれば、三島由紀夫の自伝的小説『仮面の告白』（一九四九）にも高座海軍工廠で台湾少年工に物語を語り聞かせる一段があるという（加藤邦彦「二視同仁の果て——台湾人元軍属の境遇」勁草書房、一九七九年、一七二頁）。
- (53) 磯田光一『殉教の美学』（冬樹社、一九七九年）、および村松剛『三島由紀夫の世界』（新潮社、一九九〇年）を参照した。ただし、佐藤秀明によれば、三島由紀夫の聖戦思想は徴兵年齢が近づくにつれて後退し、現実的な状況への対応に迫られていったと見なす方が実態に即しているという（佐藤秀明『三島由紀夫——悲劇への欲動』（岩波書店、二〇二〇年、六十四頁）。
- (54) 吳明益、前掲『睡眠的航線』、二一五頁。
- (55) 同上書、二一六頁。

- (56) 早乙女勝元『語りつくす戦争——十五人の伝言』（河出書房新社、二〇〇二年）、および早乙女勝元『ハロランの東京大空襲——B29捕虜の消せない記憶』（新日本出版社、二〇一二年）を参照した。
- (57) 呉明益、前掲『睡眠的航線』、二一九頁。
- (58) 同上書、二二〇頁。
- (59) 同上書、二二〇頁。
- (60) 欧佩佩、前掲論文、一〇〇頁。
- (61) 呉明益、前掲『睡眠的航線』、二五〇頁。
- (62) 名古屋には三菱重工名古屋航空機製作所があり、一九四四年十二月十八日の空襲では二十五名の少年工が死亡し一時に最大の犠牲者数となっていた（樋口雄一、前掲論文、八頁、および王溪清・郭嘉雄、前掲論文、一二二頁）。
- (63) 日華親善千手観音慶讃会『千手観音光来記』（日華親善千手観音慶讃会、一九四二年）を参照した。
- (64) 呉明益、前掲『睡眠的航線』、二五二頁。
- (65) 同上書、二五二頁。
- (66) なお、汪精衛については、古厩忠夫『漢奸』の諸相——汪精衛政権をめぐって、大江志乃夫ほか編『岩波講座 近代日本と植民地 六 抵抗と屈従』（岩波書店、一九九三年）、および劉傑『汪兆銘と『南京国民政府』——抵抗と協力の間』、劉傑・三谷博・楊大慶編『国境を越える歴史認識』（東京大学出版会、二〇〇六年）を参照した。
- (67) 呉明益、前掲『睡眠的航線』、二五四頁。
- (68) 同上書、二五五頁。
- (69) 浅野豊美『台湾の日本時代をめぐる歴史認識』、劉傑・三谷博・楊大慶編、前掲書、二五六頁。
- (70) 劉亮雅『後現代与後殖民——解嚴以来台湾小説專論』（台北・麦田、二〇〇六年）五十二―五十三頁。
- (71) 劉亮雅、前掲『後殖民与日治記憶』、一〇九頁。
- (72) 呉明益、前掲『單車失窃記』、三八六頁。
- (73) 呉明益・張鉄志『小説的魔術——照見失窃的時代与記憶』『小日子』 <https://oneliteday.com.tw/%e5%b0%8f%e8%aa%a7%9%84%e9%ad%94%e8%a1%93%e7%85%a7%8%a6%8b%e5%a4%b1%7%ab%8a%e7%9a%84%e6%99%82%e4%b3%e8%88%87%e8%a8%98%e6%86%b6/>（二〇二一年一月三十日アクセス）を参照した。
- (74) 呉明益は『自転車泥棒』の後記でも「この小説はノスタルジーという感傷によるものではなく、わたしが経験したくない

時代に対する敬意と、やり直すことのできない人生での体験への関心によって書いた」(呉明益、前掲『單車失窃記』、三八九頁)と記している。

- (75) 同上書、一五三頁。
- (76) 同上書、一八二頁。
- (77) 吉川利治編『近現代史のなかの日本と東南アジア』(東京書籍、一九九二年)二〇七頁。
- (78) 倉沢愛子「東南アジアの民衆動員」、大江志乃夫ほか編『岩波講座 近代日本と植民地 二 帝国統治の構造』(岩波書店、一九九二年)二四三～二四四頁。
- (79) 同上論文、二四四頁。
- (80) 「マレー最前線に活躍するわが自転車隊」『読売新聞』(一九四二年一月二十三日)、および「快速の銀輪部隊突入」『台湾日日新報』(一九四二年二月二日)を参照した。
- (81) 呉明益、前掲『單車失窃記』、二一四頁。
- (82) 同上書、二二三頁。
- (83) 馬翊航、前掲論文、二四八～二四九頁。
- (84) 菊池一隆『日本軍ゲリラ 台湾高砂義勇隊』(平凡社、二〇一八年)四十八頁。
- (85) 呉明益、前掲『單車失窃記』、二一四頁。
- (86) 同上書、二一四頁。
- (87) 同上書、二一八頁。
- (88) 同上書、一三九頁。
- (89) 同上書、二二二頁。
- (90) 同上書、三五二頁。
- (91) 浅野豊美「北ビルマ・雲南戦線における日本軍の『玉碎』と慰安婦——軍の作戦と民間人保護責任をめぐる」、馬曉華編『新たな和解の創出』(彩流社、二〇二〇年)十六頁。
- (92) 何世同「一九四二年『仁安羌之戦』始末」『国防雜誌』(二〇一七年、第三十二卷第二期)三十五～三十六頁、および藤井元博「中国国民政府の対日戦略と軍事作戦——一九四二年のビルマ戦を事例として」『戦史研究年報』(第二十二号、二〇一九年)二十四頁。なお、台湾の国防研究院も最終的には中英両軍の連携不足で失敗に終わった作戦であったとしながらも、西南太平

- 洋での連合国との結合を強め、中華民国の国際的地位を高めた一戦であったと高く総括しているという（菊池一隆『中国抗日軍事史』有志社、二〇〇九年、一四八頁）。
- (93) エナンジャウンの戦いに対する台湾での社会的評価については、何世同、同上論文、および王懷慶「一九四二年中国遠征軍同古作戦研究」『陸軍學術』（第五十五卷第五六四期、二〇一九年）に詳しい。
- (94) 吳明益、前掲『單車失竊記』、二二八頁。
- (95) 同上書、二九四頁。
- (96) 羅広仁「走過大江大海——亞洲象林旺爺爺的奇幻旅程」『台灣博物季刊』（第三十七卷第三期、二〇一八年）六十～六五頁。
- (97) 林義隆「編述者序」、林春長著（林義隆編、馮如瑄訳）『戰爭与林旺』（台北・台湾商務印書館、二〇〇六年）三頁。
- (98) 吳明益、前掲『單車失竊記』、三二〇頁。
- (99) 同上書、三五五頁。
- (100) 劉亮雅によれば、中国遠征軍に参加したムー分隊長がエナンジャウンの戦いに対して一切の沈黙を貫くのは、一九五〇年代の白色テロで起きた政治的弾圧であった孫立人事件を連想させるといふ。物語中では二二八事件や白色テロも暗示していくことで、太平洋戦争に関する事柄にとどまらず、台湾内部に残る省籍矛盾や族群対立の解消を描いていると見なすこともできるといふ（劉亮雅、前掲『後殖民与日治記憶』二八七～二八八頁）。

本研究は科研費・研究活動スタート支援「19K23080 戦後台湾文学における『戦争記憶』に関する基礎的研究」の助成を受けたものです。

